



TITLE:

# 学会抄録 第11回日本泌尿器科学会 中部連合地方会

AUTHOR(S):

---

CITATION:

学会抄録 第11回日本泌尿器科学会中部連合地方会. 泌尿器科紀要 1961,  
7(5): 622-632

ISSUE DATE:

1961-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112134>

RIGHT:

## 学 会 抄 録

## 第11回 日本泌尿器科学会中部連合地方会

昭和35年11月3日 於 大阪医大

## 特 別 講 演

## 男性不妊の研究

大阪医科大学教授 石神襄次

近時内分泌学の進歩と共に男子性腺機能失調症に対する研究は極めて盛んとなり、種々の新発見が報告されつつある。然し男性不妊の原因に就いては2、3の研究者によつて断片的に解明されているに過ぎず、その大部分は不明の状態であり、従つてその治療効果に就いても尚満足なものとは云い難い。我々は数年来本学泌尿器科教室に於て行つた各種動物実験及び男性不妊患者に対する臨床諸検査の結果を報告し、特にその内明らかになつた2、3の点に就て強調すると共に各種薬剤による治療結果に就ても併せ述べたい。

## 1) 精嚢腺の妊孕に及ぼす影響

動物実験：成熟雄海狗の精嚢腺を剔出し、精嚢腺の妊孕に及ぼす影響に就て検索し剔出後10カ月迄は妊孕に何等障碍を与えず、対照と同様の力を示すが10カ月以後は漸次睪丸に萎縮を来し造精機転の障碍をも伴う事が明らかとなつた。

## 2) 甲状腺の雄性性腺機能との関係

雄性ラット及び家兎を用い、甲状腺剔出、 $I_{131}$  大量投与、下垂体剔出等を行つた後の睪丸組織、副腎組織等に就て検索を加え、更にその妊孕に及ぼす影響についても観察した。

## 3) ビタミンEの雄性性腺に及ぼす影響

雄性未成熟、成熟ラットに対してビタミンE欠乏食を与えた場合の睪丸組織に及ぼす影響を観察し、更に各種睪丸障碍 1) 温度障碍（高、低温障碍） 2) 機械的障碍 3) 放射的障碍（ $I_{131}$ , X線） 4) 化学的障碍 5) 内分泌障碍、を加えた成熟雄テツテに対しビタミンEを投与して、その睪丸組織の回復状態を対照と比較した。

## 臨 床 実 験

本学泌尿器科外来を訪れた男性不妊患者に対して、精液検査（精液量、果糖量及び減少率、精子数、精子運動率）等精嚢腺X線検査、睪丸組織学的検査、尿中

17KSの定量、副腎機能検査、甲状腺機能測定を行い、特に精嚢腺X線像、副腎機能、甲状腺機能に興味ある所見を得た。又不妊の患者に血精症の存在する事の多い点から正常及び病的精子に対する各種血清、細菌汚液、病的精液の影響に就いても観察した。

以上の所見に基いて此等の患者に対し、ゴナドトロピン、アンドロゲン併用療法、2) ビタミンE大量投与、3) トリヨードチロゲン投与、4) TSH投与等によつて精子数の増加状態を観察し、又特殊の症例には精管復元術を施行、更に一部の症例に対してAID, AIHを行つた結果に就ても概述したい。

## 招 請 講 演

## 1) ある面より見た腎炎

大阪医科大学教授 浜本祐二

糸絨体腎炎に関する実験的研究に際して、抗原として赤血球を用いた一連の研究を行つて糸絨体腎炎に於ける糸絨体の特色を殆んど全部具備するような糸絨体炎を発現し得た。

この際当教室の研究による理論的解析をすれば、上記糸絨体炎は多分の間質性炎を加味していると考えられる。そこで間質性炎の比較的少ない血管内性抗原抗体反応による糸絨体炎を構想し実験を行つて見た。この場合は糸絨体の外に尿管管系に障害の強い（ネフローゼの傾向を持つ）腎変化を認めた。かかる腎変化は自家抗体を持つ疾患、即ち後天性溶血性貧血、血小板減少性紫斑病等の場合の腎変化に酷似するが、それに関する実験的研究により上記疾患の病理を解析したい。

又病理組織学的には剖検時、子癇腎炎、尿毒症、全身性シュワルツマン現象によると考えられる疾患、等々の如くこれ等の腎変化に似た変化を持つ種々なる疾患が考えられるが、これ等を実験的に時間的経過の面から整理して見た。

## 2) 尿管粘膜の移植

大阪市立大学助教授 原田直彦・福山和宏  
岩本洋三・服部 洋・田中公一郎・朝倉 保

尿管を半結紮して、3週間後に再開腹すると、その尿管は Hydroureter の状態に陥っている。その結果、尿管粘膜を採取し、腹膜に移植することが可能になる。移植せられた尿管粘膜は、嚢腫をつくるので、これに尿管を吻合すると、新しい尿路をつくることができる。かくして、人工膀胱をつくるために膀胱粘膜を用いなくてもよい方法が発見された。

しかし、尿管からは、充分に広い粘膜を採取しにくい、この欠点を補うために、胃粘膜を移植してみた。そして、消化管系の粘膜もまた、移植されると、嚢腫をつくることが判明した。この方法によると、尿路のみならず、腹腔内の多くの管腔臓器の再建が、可能になるのではあるまいか？

私達は、粘膜移植という新しい分野を開く努力をつづけている。

## 一 般 演 説

### 1. 腎局所低温法の研究

前川正信・中新井邦夫・大川順正  
三瀬 徹 (阪大)

腎血流遮断操作を伴う腎保存手術後の残存腎部の急性腎不全を防止するため、教室では腎神経遮断法及び腎局所冷却法を応用しているが、前者については既に報告した (日泌尿会誌, 50: 787, 1959) 今回は腎局所冷却法について、その応用の実際及び犬についての実験成績を報告した。

I 臨床的研究: 腎部分切除術 3 例及び腎切石術 3 例の計 6 例に応用した。冷却は首巻き氷嚢 2 ケを用い、髓質温度は 20 分で  $20^{\circ}\text{C}$  前後に冷却された。対照の 9 例を含めて計 15 例の術後経過は順調で、術創感染は認めなかった。

II 犬に於ける実験的研究: 72 匹の成犬を用い、大動脈内墨汁注入法による腎内循環の観察、組織 (HS 染色) 並びに組織化学 (alkaline phosphatase 及び succinic dehydrogenase) 的研究及び単腎犬に於ける腎機能 ( $\text{C}_{\text{PAH}}$  及び  $\text{Cm}$ ) の検索を行い、冷却群 (阻血 1 時間) は対照群 (非冷却, 阻血 1 時間) に比し、その被むる腎障害が軽度で、且つその回復が速やかであることを認めた。

以上により、腎局所低温法は多少の手間はかかるにせよ腎機能保全の見地からは施行すべきものであると結論した。

### 2. エチールウレタンの腎阻血性低酸素法に及ぼす影響 (予報) 巽 祐彦 (大阪警察)

Hypoxia の防禦に有効な Ethylurethane (EU) を腎阻血に適用し著効あることが確認されたが、その

機序解明の目的から、in vitro で Warburg 法を用い、呼吸活性の研究を進めた。今回は主として hypoxia の影響について報告する。対照実験として、ether 麻酔の下、一側腎血管を結紮、一定時間後、左右腎を摘出、別個に homogenize し、内因性呼吸及びコハク酸酸化の活性を測定した。非結紮側の酸素消費を対照として比較すると、4 時間結紮例の 30 分値で、前者は結紮により 20% 前後減少するに比し、コハク酸酸化は約 40% 阻害された (全実験例の平均) この阻害は夏期に高く、それ以外の季節には低い傾向がある。

一方、内因性呼吸よりもコハク酸酸化の方が強く阻害される点を、脱水素酸素系と酸化酵素系に分けて研究を行つたが、後者はコハク酸酸化の阻害度に近く、前者よりも 20% 以上高かつた。目下、これらに対する EU の作用をも検討中である。

### 3. 泌尿生殖器系疾患のボーラログラフ蛋白波の成績について (その 2)

一 汙液法による血清蛋白波の成績一

林 法信 (国立松山病院)

第 12 回西日本皮膚泌尿学会の発表 (詳細は泌尿紀要, 6 巻 10 号掲載) に引き続いて、泌尿生殖器系疾患 106 例について、ボーラログラフ蛋白波の示す癌鑑別診断的価値を検討するため、汙液法 (第 III 法及び第 IV 法) によつて測定した成績を報告した。

1) 第 III 法に於ては、陽性率は第 1 波及び中間値による判定が臨床的に意義が大き。腎腫瘍 (100%), 前立腺癌 (80%), 膀胱癌 (50%) で、悪性腫瘍群の陽性率は約 77% であり、癌鑑別診断の見地よりすれば第 III 法が第 IV 法よりも優れている。また各種疾患の波高の平均値では第 1 波が第 2 波の波高よりも高いものが圧倒的に多い。

2) 第 IV 法に於ては、陽性率は第 2 波による判定が最も高率で、第 1 波、中間値は略同率であつた。一般に第 IV 法の陽性率は第 III 法より低率で、腎腫瘍 (100%), 前立腺癌 (0%), 膀胱癌 (60%) で、悪性腫瘍群の陽性率は約 53% であつた。また各種疾患の波高の平均値では第 2 波が第 1 波の波高よりも高いものが多く、第 III 法の場合と逆であつた。(この詳細は泌尿紀要 6 巻 12 号掲載予定)

### 4. 腎性高血圧に関する実験的研究

宮崎 重 (愛媛労災)

1 側腎を剔除したラットと健康なラットとのパラビオーゼを作り、2 カ月後に残存腎を剔除して各ラットの血圧の変動をしらべた結果、正常な腎臓を剔除して死亡しない状態にしておけば、腎剔除ラットには 7 ~

8日後から明らかに Persistent な高血圧が惹起せられるが、他側ラッテには高血圧は起らない。この事からは、正常な腎臓からは腎外の或種の血圧上昇物質を中和する様な働きを有する物質が作られている可能性が考えられる。そしてこの物質は Parabiosis Barrier を通らないから恐らく正常な肝臓で非活性化せられるのかも知れない。

質 問 井上彦八郎（阪大）

動脈圧を保つには正常腎は他の因子と異なり反つて血圧上昇を防ぐ作用を有しているものとする（我々の動物実験の成績から）今演者の言われた報告からこの点が証明されたか否か又両腎切除の場合の血圧上昇にはレニンに関係しないと考える。

回 答

正常腎臓からは Antihypertensive な物質が作られている事が本実験から推測せられるが、この Antihypertensive substance が正常血圧をも下降せしめるか否かは、この実験のみからは何とも言えない。

両腎切除の場合の血圧上昇にはレニンに関係しないと言う説には同感である。

#### 5. 尿管狭窄に関する実験的研究（第1報）

宮林俊男（金大）

犬及び家兎を使用して下記の実験を行い、主として組織学的に検索した結果について報告した。

- 1) 尿管の横断及び端々吻合。
- 2) 尿管の斜断及び吻合。
- 3) 尿管の切断及び近接縫合。
- 4) Davis の intubated ureterotomy。
- 5) 尿管皮膚吻合。
- 6) 尿管周囲（1及び2カ所）に絹糸をゆるく巻付ける。（尿管周囲炎作成実験）

以上の実験から尿管狭窄の成因及び尿管筋層の長軸方向への再生が不可能である事の原因について研究した。

#### 6. 尿管腫瘍の細胞診

大熊博雄・水本竜助（日大）

我々は尿路の剥離細胞及び Ehrlich tumor cell に14種の異なった色素を用いて手技簡単な squasch method を行つた結果、本法が routine test に適し、特に細胞内の微細構造の観察に良い事及び我々が使用した色素では gentiana violet が最も良かった事を述べた。

#### 7. オデルカ・カメラによる尿路撮影法（第1報）

後藤 薫・日野 豪・本郷美弥・沢西謙次・  
久世益治・蛭多量令・田中正躬・中川 隆・  
高橋陽一（京大）

我々は機能的X線診断法として連続撮影装置による連続撮影法、イメージ アンプリファイヤーによるX線映画撮影法を発表して来た。今回はオデルカ カメラを用いて連続撮影法を行つたので、その知見につき報告する。

本装置は解像力がすぐれているため 70m/m サイズのフィルムで四切に匹敵する写真が得られ、フィルム代を節約して数十枚の連続撮影を行うことができる。経腰の腹部大動脈撮影における腎動脈の描出状態、精囊撮影における精管、精囊、射精管等の描出状態をスライドにて示した。

#### 8. 経腰の腎盂尿管撮影による診断例

小田完五・井上 東・中橋弥光（京府医大）

腎の停滞腫瘍の診断には明瞭な腎盂尿管像を描出することが必要である。時に静脈性にも逆行性にも像が得られないことがあり、この際経腰の腎盂尿管撮影法が役立つ。抗結核剤による治療や婦人科の疾患の上部尿路に及ぼす影響の結果腎の停滞腫瘍の症例は益々増加し、逆行性腎盂撮影不能の頻度も高まりつつある現在、本法の有用性を強調した。水腎症、膿腎症の数例について概略説明し、腎結核による無尿に本法を行い尿管皮膚瘻術の適格な適応を決定し得た1例を報告した。

追 加

菅野英男（名市大）

当教室でも穿刺腎盂撮影法と称して、演者の述べられた方法を、routine な検査法として実施している。逆行性乃至経静脈性撮影法で腎盂尿管像が得られない症例に対しては、有力な診断の手段と考えている。本法により水腎症、閉塞性結核膿腎症、尿管腫瘍、X線陰性の尿管結石等を診断している。

尿管閉鎖による水腎症及び腎周囲水腫について示説した。

#### 9. 囊胞腎の2例とその囊胞液化学組成の分析

山本 弘・倉岡雅男 川本幹夫・山口春雄  
（大阪通信病）

従兄妹関係にある典型的囊胞腎の2例について報告し、囊胞腎の病原を解明するための一助として次の二つの実験を行つた。

（A）第1例（42才、男子例）及び第2例（39才、女子例）について左腎の減圧手術時、囊胞液を吸引、採取し囊胞内容と血液の成分比較を行つた結果、囊胞液は血漿の漏出物であつて、腎盂系の尿成分でないことが立証された。

（B）第2例右腎減圧手術時、右腎露出後 PAH 点滴静注を行い、点滴直前及び点滴開始20分後に夫々、囊胞液及び血液を採取、PAH 濃度を定量した結果、

囊胞腎の囊胞が cystic nephron であることが推定された。

#### 10. 精系血管に関する 2, 3 の病理組織学的観察

稲田 務・酒徳治三郎・北山太一(京大)

除辜術によつて得られた精系血管および辜丸内血管の組織像を観察して次の様な結果をえた。

1) 130ヶの精系動脈の原疾患別特徴としては、副辜丸結核に際して37例中11例、30%に結核性精系静脈炎を証明したが、その他には特異的な変化をみとめなかつた。

2) 16才から82才にいたる症例の年令的变化を観察した所、動・静脈ともに加齢による変化が著明であつた。この様な病変は静系血管の counter-current exchange に悪影響を及ぼし、ひいては造精機能にも障病的に働く可能性のあることについて言及した。

#### 11. 前立腺腫瘍に対する放射性亜鉛の効果、並びに代謝への影響について

三矢英輔・

瀬川昭夫・鳥居 肇・牧野昌彦(名大)

前立腺腫瘍患者に対し  $110\mu\text{C}$  より  $88\mu\text{C}$  の放射性亜鉛 ( $\text{Zn}^{65}$ ) 塩酸塩を静注、或は前立腺組織内に注入し、手術迄の短期間に於る変化を追求し、血中前立腺酸ホスファターゼ、尿総酸ホ、前立腺酸ホの減少の傾向を認めた。併し尿中 17KS、同分割、血糖、残余窒素、肝機能、血清アルブミン、グロブリン、血清無機質には変化を認め得なかつた。尿中エストロゲンは上昇するものを認めた。鼠精管より  $\text{Zn}^{65}$  注入では辜丸に肝の10倍の  $\text{Zn}^{65}$  を認めたが、人前立腺注入例では数日中に急速に体中に拡散し、人体表よりの前立腺 Scanning は成功しなかつた。前立腺注入直後及び6時間後摘出した前立腺につき作成した Scintigram を供覧した。

#### 12. 前立腺性酸ホスファターゼの研究(第2報)

豊島 淑(大市大)

第1報において実験動物犬に性ホルモンを投与し、前立腺およびその他諸臓器中の前立腺性酸ホスファターゼ(PAP)値の変動について報告したが、今回はこれら性ホルモン投与による犬の前立腺の組織学的変化と PAP の増減とに関連があることが認められたので報告する。男性ホルモン投与により前立腺は組織学的には腺肥大像がみとめられたが、PAP 値には著変がなかつた。しかし、唯1例において PAP 値が 120.10 KAU に及ぶものがあつたが、この場合はより高度な腺肥大像をみた。これに反し女性ホルモン投与、去勢および去勢後ブレドニンを投与した例は腺組織の萎縮、間質の増殖がみられ、PAP 値の低下を認めた。

#### 13. 血清酸性ホスファターゼの簡易測定法について

篠田 孝・尾関信彦(岐阜医大)

前立腺癌における血清酸フォの活性値を、 $\alpha$ -naphthyl phosphate を基質とする、“phosphatase acid”を使用して、比較的簡単に測定し、14例(全例)に 1.0 B.U. 以上の上昇値を認めた。又  $\alpha$ -naphthyl phosphate と p-nitrophenyl phosphate の2種の基質に、前立腺性酸フォの活性を特異的に阻害するといわれる L-tartrate を作用させて、前立腺性及びその他の酸フォの活性値を比較測定した。その結果  $\alpha$ -naphthyl phosphate は前立腺性酸フォだけではなく、他の酸フォによつても水解されるが、特に前立腺性のものによつて強力に水解されることがわかつた。従つて前立腺癌の血清酸フォ測定の場合には、 $\alpha$ -naphthyl phosphate を基質として用いるのが有利であると考えられる。

#### 14. 前立腺腫瘍に於けるホルモンの消長に就いて

三矢英輔・瀬川昭夫・前川 昭・三宅弘治

(名大)

前立腺腫瘍に対し、治療前後の尿中総 17-KS (Drester 氏法)、17-KS 分割(鈴木氏法)及び尿中エストロゲン(Hydroquinon-Kober 氏法)の定量を行つた。治療前の総 17-KS は一般に正常範囲(平均 10 mg./dl)にあり、尿中エストロゲンは 0~20 $\gamma$ /d を示した。之等に対し女性ホルモン使用によりエストロゲンは 20~100 $\gamma$ /d と増加、その後除辜術を行うと、急激に減少した。17-KS も一般に除辜術により減少している。その他、前立腺剝出術、 $\text{Zn}^{65}$  注入、Predonisolon、更に男性ホルモン使用群と比較検討している。

前立腺腫瘍と 17-KS 及びエストロゲンとの間には一連の関係があり、更に辜丸機能、副腎機能により大に

#### 15. 辜丸機能検査法としての Gonadotropin-Test (第2報)

岡元健一郎・齊藤宗吾・

愛甲矩義・新山孝二(鹿大)

第1報においてラットを使用し下垂体剔除後一定量の Gonadotropin を投与し、副性器の反応度をみて辜丸機能を判定する方法について基礎的実験の成績を発表したが、今回は更に数種の実験的辜丸障害をつくり特にその Leidig 細胞機能を同様の方法で観察した。

実験的辜丸障害として Wistar 系幼若ラットを使用して Estrogen, PHP (Castan-Kowa), Honvan 投与、停留辜丸、辜丸X線照射、カドミウム塩投与、下垂体剔除の7種のをえらび処置直後、1週、2週、3週後に垂剔して Gonadotropin を投与し、下

垂体剔除群は剔除後2日, 5日, 10日, 20日, 60日後に Gonadotropin を投与し各々副性器反応度を判定した。

16. スラロイドの向腎作用 志田圭三(東医歯大)  
Testosterone (T), Nor-testosterone (N-T), dehydroepiandrosterone (DEAS), androstanolone (ASN), androstenedione (ASD) Progesterone (P) のマウス尿腎 LD<sub>50</sub> に及ぼす効果をみるに ASN, ASD がぬもすぐれていた。ラット偏腎剔除後の代償性肥大促進効果をみるにやはりこの両者がすぐれている。ついで, T, ASN, Methylcandrostenediol (MASD), 4-chloro-testosterone (4Cl-T) についてみるに, マウス LD<sub>50</sub> ラット腎代償性肥大促進効果ともに 4Cl-T は ASN 多少おこるが, 男性ホルモン作用きわめてよく, 腎肥大作用/男性ホルモン作用の比は 4Cl-T が最もすぐれ, MASD, ASN, T の順となる。術後腎機能低下をきたした Cystenniere, 不適合流血による腎不全に 4Cl-T 20~50mg 連日使用, 良好な成績を得た。

#### 17. 甲状腺と雄性性腺機能との関連性について

原 信二(大医大)

- 1) 雄性甲状腺剔除ラットに於て, 1定の時日を経たのち, 睪丸組織像及び甲状腺 PBI を測定した。
- 2) 雄性脳下垂体剔除ラットに TSH (プレチロン) 投与後, 1定の時日を経たのち, 睪丸組織像及び甲状腺 PBI を測定した。
- 3) 雄性ラットに大量 I<sub>131</sub> 投与後, 1定の時日を経たのち睪丸組織像及び甲状腺 PBI を測定した。
- 4) 雄性甲状腺剔除家兎, 雄性家兎に I<sub>131</sub> 大量投与後, 長期にわたる 17KS の測定を行つた。
- 5) 甲状腺摘出, 大量 I<sub>131</sub> 投与を雄性ラットに併用し, 1定の時日を経た後, 睪丸組織像と甲状腺 PBI を測定した。
- 6) 男性不妊症に於ける甲状腺機能検査について調べた。

#### 18. Vitamin Eの雄性性腺に及ぼす影響(第1報)

宇野博志(大阪医大)

離乳後間もない未熟雄性ラットを特殊ビタミンE欠乏飼料で飼育し, 成熟後屠殺して其の睪丸組織を検索し, 明らかに造精機能障害のあることを認めた。

次いで成熟雄性ラットに各種実験的睪丸障害を惹起し, これに Vitamin E を大量投与して其の障害阻止に就いて検索したところ, 各種性ホルモンによる内分泌障害 I<sup>131</sup> に依る放射線障害に於ては大した阻止

を認めなかつたが, 高低温障害, マレイン酸に依る化学的障害に於いて明らかに障害阻止を組織学的に認めた。

更に4人の乏精子症患者に Vitamin E の大量投与を行い, 其の精液所見並びに尿中 17-KS 値の変動を探索した。精子数に変化は認められないが, 精子運動率及び尿中 17-KS 値の増加を認めた, これに依り Vitamin E は少くとも精子の運動性に好影響を与えるものと推察する。

#### 19. 男子不妊症の臨床 百瀬剛一・三橋填一・

島崎 淳・片山 喬・並木徳重郎(千葉大)

最近経験せる精液に病的所見のある症例につき, 種々の検索を実施した。即ち年令は26~35才が大部分であり, 不妊年数は結婚後3~8年が多い。職業に農業と会社員が大部分を占める。之等に就ての睪丸組織像は無精子症では Aplasia が最も多く, 以下 Arrest, Disorganization, 正常像の順となる。

次に治療として二, 三興味あるものを述べると, triiodothyronine 療法は13例中略々半数に活動精子数の増加を見, その優秀性を認めた。ビタミンE療法は我々の症例ではあまり良い効果を示さなかつた。最後に女性ホルモンによる Rebound Phenomenon の可能性につき言及した。

#### 質 問 志田(圭三東医歯大)

エストロゲンを与えて, ポテンツの低下はおきないでしょうか, 治療中の障害をなくする意味に於て, アレドロゲン投与が望ましい, 投与量は精子数, 尿ゴナドトロピン測定を行い抑制量をたえずコントロールする事が必要であります。

#### 回 答 島崎 淳(千葉大)

Estrogen のデボ剤を2~3回使用すると Potenz の減少, 更には Mamma の Pigmentation が来る。然し testosterone の Rebound に比し少量で良く, 経済的にも有利であるので使用した。

#### 20. 男性不妊症の統計的観察 加藤篤二・

柳原正志(広大)

昭和31年から昭和35年9月まで広大泌尿器科外来に不妊を主訴として来院した患者は合計74例で, 外来患者総数の2.7%である。その内訳は減精子症25例, 無精子症41例, 類宦官症を含む無精液症6例, 精子死滅症, 先天的両側精管欠損症各1例である。

不妊原因と考えられる既往歴を有する患者の内高熱疾患が12例で最も多く, 次に原子爆弾 2km 以内での被爆者, 薬品中毒, 脱腸手術その他の外傷によるものが夫々5例認められた。就中マラリヤ罹患者9例中無精子症7例, 減精子症2例でありそれらの患者は半年

乃至3年間キニーネを持続して内服している。

睪丸生検組織像は無精子症 20例中 Germinal cell Aplasia 7例, Spermatogenic Arrest 8例, Fibrosis 3例, Normal 2例で, 減精子症患者 6例中 Spermatogenic Arrest 4例, normal 2例, 類宦官症を含む無精液症 5例中 Fibrosis 3例, Spermatogenic Arrest 2例であつた。

精囊腺レ線像型は石神・森の分類に倣うと無精子症, 減精子症共Ⅱ型が半数であり, 無精液症では, 萎縮したⅣ型が多く認められた。

追 加 後藤 武(名市大)

当教室では男性から不妊を訴えて来院するものは少く, 過去5年半に31名であつた。このうち何らかの検査の行われたものは20名である。この20名中7名は normospermia, 1名は oligospermia, 12名は Azoospermia であつた。

Azoospermia 12名中1名は嘗て精管結紮を受けたといい, その才術の理解なく不妊症を訴えて来院した。残りの11名はスライドに示す如き内容のものであつた。

睪丸・副睪丸・精管の正常なものは5例(45.5%)で他は發育不全乃至萎縮を認めた。精囊腺撮影により, 性器の正常と思われる3例に施行したうちの2例に偏側性の精管閉塞を認めた。睪丸の Biopsy は, 外見正常なるものも含め5例に行つたが, 精子形成不全乃至その欠如を認めた。

当教室の経験では, 男性不妊症を主訴とするもののその原因は大部分は原発性の不妊症である。

## 21. Urokolon-M の使用経験 岡 直友

後藤 武・菅野英男・塚本俊雄(名市大)

60% U-M 20cc を使用して200例の主に外来患者に対し連続的に罹患疾患を特に選択することなく, 非圧迫性排泄性腎盂撮影を実施した。診断に有効な満足すべき腎盂像は70%に得られた。副作用は34.7%に発現したが重篤なものは1例もない。

逆行性腎盂撮影(20%) 経腰の大動脈撮影(75%) 経皮的穿刺腎盂撮影(60%), 精囊腺撮影(60%)に U-M を使用し極めて満足すべき結果を得た。

U-M は従来の Urokolon に匹敵する優れた造影能を有し, 血管内投与時の副作用が少いので安心して使用出来る造影剤である。

詳細は原著(臨床皮泌)にゆずる。

追 加 後藤 薫(京大)

演者はネフログラム描出が不充分と述べておられますが, 大量を使用されて鮮明なネフログラムが描出できると思います。我々の教室では 50cc を12ゲンジ針

で2~5秒で静注しております。

## 22. 泌尿器科領域に於ける Besacolin の使用経験

伊藤鉦二・阿部貞夫(岐阜医大)

正常膀胱の内圧に及ぼす Besacolin の影響を観察した結果, 内圧曲線は軽度上昇し, 排尿収縮反射が亢進し, 収縮力が増強するのが認められた。種々の原因による慢性残尿患者に対して使用した結果, すべてに残尿の減少を認めた。しかし一部のものでは投与中止後, 再度残尿が生じた例もある。手術後の急性尿閉には著効があり, 術後の腹部膨満及び悪心嘔吐のある症例では, 可成りの効果があつた。散剤では相当長期にわたつて投与した例にも副作用はなく注射による者では, 小数例に発汗, 胃部疼痛があつた。

追 加 塚本俊雄(名市大)

慢性の排尿困難, 又は尿閉の患者8例に Besacolin を使用, 1日 1.2 gr, 3分服, 略々19日間の使用にて症状も緩解, 膀胱内圧曲線にて膀胱筋緊張と収縮力を大なり小なり増しその治効を挙げた。

追 加 後藤 薫・本郷美弥・高橋陽一(京大)

術後急性尿閉23例に Besacolin を皮下注して, 90例に排尿をみるようになった。副作用は2例に認め, その内1例には Atropin を使用した。神経因性膀胱を主とする排尿障碍患者11例に Besacolin の長期間の経口投与により, 7例に症状の改善を認め, 1例は副作用により治療を中止した。他の3例は経過不詳である。症状の改善を見た4例の排泄性膀胱内圧測定図を示した。(泌尿紀要7巻3号参照)

## 23. 膀胱癌に対する制癌剤の局注療法について

江本侃一・宮本睦夫(徳島大学)

長さ 31mm, 太さ 1mm の長針を作り, 此をバーカ型膀胱鏡を用いて経尿道的に膀胱壁筋層内に直接制癌剤を注入した。他に Co<sup>60</sup>, 全身投与も併用した。今回はマイトマイシンを用いた。経過を観察し得た3例の成績では5~6回の注射で(3ヵ月)自覚症状, 内視鏡所見は改善されるが, 組織学的にはなお新癌巣を認めたものがある。ただ人腫瘍は組織学的にも有効であつた。以上の結果は制癌剤の効果は必ずしも有効であるとは断言できないが, 注射療法と共に用いれば多少とも症状の改善が早められるのではなからうかと思う。

追 加 田村誠一郎(岡大)

Carzinophilin, Tespa, Mitomycin c 及び O-X 物質等の制癌剤を膀胱腫瘍に対して全身及び局所的に使用し, その効果を剝離細胞学的及び病理組織学的に検討した。この所見から各制癌剤を通じ, 局所使用の場合がより有効に働く点を追加した。

## 24. 間質性膀胱炎の一治験例(デカドロン)

野木 馨(奈良医大)

46才, 男子. 終末排尿痛, 頻尿(1日20~30回), 肉眼的血尿を訴えて来院す. 約4カ月間止血剤, サルファ剤(シノミン, ウロサイダル), 抗生物質(マイシリン, アクロマイシン)を投与するも殆んど効果なく, 膀胱容量は約50ccに減じた. 検尿所見: 蛋白(卅), 赤血球(+), 白血球(卅), 細菌(-) (検鏡及び培養) ここに於てデカドロン投与を行つた所, 著効をあげることが出来た. 即ち2mg 3日間後に膀胱容量は100ccへ, 2週間後200ccへ増加し一般膀胱尿道症状も大いに改善された. 42日間計55mg投与により略治した.

追 加

金沢 稔(和医大)

22才女子, 約2年前から頻尿, 排尿後痛, 間歇性血尿を訴えて来院した. 膀胱頂部より後壁にかけて出血性の靡爛面をもつた, 一見肉芽腫又は腫瘍の所見であつた. 部分切除術を行つたが約3cm径の不正円形潰瘍で周辺の浮腫が著明であつた. 本症例の尿中2-5DHPPAの定性を行つたが陰性であつた, 近日チロゲン負荷試験を行う筈.

## 25. 先天性原因による水腎病変の2例

矢野 登・多田 茂・斉藤俊哲・大柳祐(三重大)

第1例は23才の女子で主訴は全身倦怠感で尿路症状を伴わず, 内科を訪れて右側腹部に巨大なる腫瘍を発見し, 泌尿器科の検査を受けて, 水腎症と診断され手術の結果は内容11を越える巨大水腎症であつた. 原因に就ては腎盂尿管移行部を組織標本にて追究した結果, 尿管は完全に閉塞し, 然も腎盂面とは相当の距離を有しており, 先天的なものと考えた.

第2例は28才の女子で蛋白尿を内科にて指摘され泌尿器科の検査を受けた. 逆行性腎盂撮影を行うと融合腎様の像を呈し, 手術の結果は腎実質が上・中・下の三つに分れた水腎様変化を有する腎で同時に高度のrotation anomalyを伴っている事が分つた. 恐らくこれは胎生期の分葉腎が高度で, これが過度のrotationによる尿管の屈曲により水腎症を起し, 圧迫により腎実質は分離を著明にしたものと考えた.

質 問

井上彦八郎(阪大)

今言われた様な巨大水腎症になるには多少の尿の通過が必要であると考えられ, 先天性に完全に腎盂と尿管との交通がなければ反つて水腎症性萎縮腎となつて小さくなるのではないかと考える.

回 答

阪大, 井上氏に対する

尿管の末端の完全閉鎖を組織像より観察した.

追 加

林威三雄(阪大)

我々の教室に於ても, 昭和32年より現在迄に手術した水腎症は総数29例である. この中, 先天性原因によるものは15例(51.7%)で, その半数以上を占めている. 特に腎盂尿管移行部に肉眼的に異常を認めない, 腎盂にのみ限局した所謂狭窄の水腎症が最も多く10例, 即ち34.5%を占めている.

追 加

沢西謙次(京大)

先に関西地方会で4例報告したが, その後経験した2例について追加報告する.

1) 5カ月, 男子. 下腹部膨隆を主訴として来院, 自排尿困難の為, 穿刺により膀胱撮影を行い, 更に220ccの残尿を得たが両腎高度の水腎を呈した. レ線的には尿道狭窄は証明されなかつたが, プシーにより軽快した.

2) 15才, 男子. 左先天性尿管狭窄による高度水腎で尿管形成術により軽快した.

## 26. 化膿性腎炎の1例, 殊にその追断について

岡 直友・塚本俊雄(名市大)

57才, 女子. 右の腫大腎と右季肋下痛にてGrawitz氏腫瘍として内科より転科. 触診上及び逆行性腎盂像にて右腎腫瘍が考えられたが, 右青排泄陰性, 排泄性腎盂陰影は2時間迄も現れず, 右側腎尿は尿蛋白陽性なるも顕微鏡的血尿も炎症変化も見られず, 腎血管撮影にて腫瘍性変化なく右腎血管の硬化像を認めてより化膿性腎炎と診断, 右腎摘出を行い, びまん性間質性腎炎を確診した.

## 27. 白血病を伴つた単純性嚢腫例

小田完五・上田恵一(京府医大)

井上某, 57才男. 3日前より突然無症候性血尿を主訴とし, 昭和35年6月18日初診. 末梢及び胸骨穿刺による血液所見から急性骨髓性白血病の診断を得た. 膀胱鏡的に血尿は左尿管口からのもので高度の純血尿である. X線学的に左重複腎盂・不完全重複尿管を発見した. 左腎摘出の結果血尿は全くみられなくなり, 上下腎盂境界部に剖面において蜂巣状を呈する一見多房性の血性嚢腫を発見した. 組織学的に嚢腫壁は一層の骨子様細胞におおわれ, 嚢腫内容は血性又は漿液性であつた. 隔壁は瘢痕性又は尿細管を有する所とみられ, 嚢腫をとり囲む腎実質中には白血病性浸潤の集落がみられた. 単純性嚢腫の形態, 成因及び同族例の血尿の原因的疾患について検討した.

追 加

大村順一(岡大)

腎の嚢腫のその成因並びに型については, 近く泌尿紀要に近藤講師が発表する. しかし, 上皮からすると, 各症例によつて, その判定は困難であることを感



ずる。

28. 症例 1) 睪丸垂捻転症 2) 直腸癌を伴った  
Grawitz 氏腫瘍 喜多芳武・白川一夫  
(関西医大)

1) 28才, 会社員。何ら誘因と思われるものなく左陰囊内部の疼痛を来し運動時に増強し, 他に症状なし。睪丸垂捻転と診断し手術断行。手術所見は少量の淡赤色の滲溜液と睪丸上部で副睪丸頭部のやや右より小豆大の暗赤色の腫瘤と, 米粒大の淡赤白色の2ヶの腫瘤を認む。大きい方は短い茎を有し捻転方向及角度不明, 小さい方は囊腫様であつた。

2) 68才の女で初診34年5月4日, クラビフツ氏腫瘍にて5月12日に右腎切除術を施行, 6月15日頃に下血を訴え, 7月10日直腸癌の診断で直腸切断術施行, 術中に子宮筋腫を発見し子宮切除術を施行, 先発癌の除去により後発癌の発育が特に旺盛になるのではないかと考えられる1例である。

追 加 片村永樹(京大)

1) 1950~1960年までの, 教室前立腺手術169例を, 統計的に観察し, そのアプローチをのべた。

2) そのうち, 前立腺肥大症の摘出腺腫の80例の病理組織学的観察では, 単純癌1例, 腺腫と腺癌の合併5例, あとは, 腺腫である。

3) 術後, 癌腫の発生した例が4例あるので, 術後の観察も必要である。

29. 副腎疾患の3例 楠 隆光・林威三雄・  
園田孝夫・松永武三(阪大)

最近, 阪大泌尿器科において, 興味ある副腎疾患3例を相ついで経験したので, 茲に報告する。

第1例: primary aldosteronism

39才の女子。頭痛, 肩凝り及び高血圧を主訴として来院, 諸種検査の結果, 著明な低K血症及び尿中aldosteroneの増量が証明された。左側副腎全切除術, 右側副腎部分切除術施行, 組織学的には左側は顕微鏡的に腺腫, 右側は示指頭大(2.3×1.7×0.8cm, 2.0g)で, 腺腫であつた。術後経過は良好で全治退院した。

第2例: Feminizing adrenocortical carcinoma

51才の男子。左側腹部腫瘤形成を内科で指摘され, 当科に精査を依頼されたもので, この時両側乳房色素沈着, 圧痛性硬結及び腫大を発見した。副腎腫瘍の診断により手術施行したが, 腫瘍の大きさは10.9×12.5×11.2cm 重さ966gであり, 組織学的には良性癌腫であつた。又女性乳房もエストロゲン性増殖を顕微鏡的に証明した。

第3例: Non-functioning adrenocortical ade-

noma

60才の男子。約3年前, 膀胱全切除術及び両側尿管皮膚瘻術を施行したが, 最近に至り右尿管口よりの膿汁排出を主訴として来院。右膿腎症の臨床診断のもとで手術を施行したが, 右副腎は小鶏卵大に腫脹していたので, 直ちに右腎副腎切除術を施行した。組織学的には副腎腺腫を証明し得たが, 術前の臨床的諸検査では何ら副腎の機能異常を証明しなかつた。

30. 副腎の手術経験 黒田恭一・津川竜三  
長谷川真常・柳瀬功一・中村武夫・和田一郎  
(金大)

副腎疾患7例(褐色細胞腫4例, クッシング症候群1例, 原発性アルドステロン症1例, 副腎腫瘍の疑で手術の結果は過形成1例, その内褐色細胞腫, クッシング症候群各1例は既報告)の手術経験に基づき, レ線診断, 手術術式, 手術に伴う患者管理の概要を述べた。

1) 気後腹膜法及び断層撮影併用法は副腎外科に対する有用な診断法であるが, 確実度に於いて限界がある。

2) 手術術式は1例にYoungの背面切開法を用いた以外は, 第12肋骨切除併用の腰部斜切開法により, 充分にその目的を達し得た。

3) 副腎手術に際しては, 血圧管理, ホルモン及び電解質補給, 感染防止に留意すべきである。

4) 治療成績よりみて褐色細胞腫の手術は比較的困難である。

追 加 前川正信(阪大)

教室に於ける副腎の手術症例を追加する。症例は2才より60才にわたる男7例女5例の計12例16副腎である。これを疾患別にみると, Cushing's syndrome 1例, 原発性アルドステロン症2例, 副腎性男子青春早発症3例, 副腎性女性仮性半陰陽1例, 副腎性男性化症1例, ホルモン非活性型腺腫1例及び高血圧2例である。手術々は上腹部横切開による経腹腔式到達法が2例2副腎, 上腰部斜切開による腹膜外的到達法が10例14副腎となつている。手術死亡はなく, 遠隔成績では2例が死亡し, 1例が不明, そして9例が生存している。剔除組織は, 癌2例, 腺腫3例, 過形成5例, 腺腫と過形成を合併するもの1例, そして正常(機能亢進)が1例であつた。教室では, 手術は上腰部斜切開による腹膜外的到達法を原則とし, 両側を同時に開検し度い時にのみ上腹部横切開による経腹腔式をとることとしている。

31. 結石を伴った興味ある泌尿器畸型の1例

森 幸夫(伊勢病院皮泌尿科) 伊東敬之

大西 武(同 外科)

25才の女子で両側重複腎盂, 左不完全重複尿管, 右完全重複尿管(交通ありと思われる)があり, 膀胱は, 両面移行上皮で被われ不規則且つ僅少の筋繊維をもち層を判別し得ず結締組織の強く増殖せる隔壁で完全に分割され(右後上より尿道に至る)外尿道口右下部に近接して開口し, その中に結石をもち, 上方腎盂より発する右側尿管が開口する。下方腎盂より発する尿管は左尿管と共に隔壁より左側の膀胱内腔に開口する。

これは上方腎盂より発する右重複尿管が, 膀胱壁内, 尿道壁内を貫通して上記の部に異状開口したものとも考えられるが Complete sagittal septum of the bladder と考えるのが適当と思う。精査の上原著にゆづる。

### 32. 尿管腫瘍の治験例 清水圭三・浅井 順 鳥居 肇・蔡 衍欽・加治安彦・大竹 浩 (名大)

本年来院した3例の婦人科の手術による尿管腫瘍患者に対し, 尿管膀胱新吻合術, 尿管回腸膀胱吻合術, ボアリー氏手術及び尿管回腸膀胱吻合術を行つたので症状, 手術法, 経過について報告し, 回腸肛置により生ずる血中残余窒素上昇, 高塩素血症は一過性である事を示した。尿管回腸膀胱吻合術, 術後退院患者5人につき, 調査を行い1例の膿置回腸に小結石の形式を認めた。尚和21年以降本科を訪れた51例の腫尿瘻につき統計的観察を行つたので報告した。

追 加 井上彦八郎(阪大)

Boari 法失敗の一つに尿管自身の病的変化も挙げられる。即ち陳旧性の尿管腫瘍ともなると尿管壁の肥厚, 拡張があり吻合部の不全を来す。従つて出来るだけ健康に近い尿管の場合に限つて本法を行うべきであると考えられる。

追 加 伊藤泰二(阪大)

Boari 手術の失敗例の原因としては, 1) 他の尿路成形術の場合と同じく尿路感染の存在が考えられる。2) 又膀胱弁作成にあたりその栄養障害を防止する目的で膀胱弁の幅を十分広くとることが大切であると考える。

追 加 岡 直友(名市大)

当教室における尿管損傷例の治験については前回の当連合地方会で述べた。その後経験した症例中 Boari 氏手術失敗例1例を追加する。33才女子の広汎性子宮摘出術後に来つた両側尿管損傷腫尿瘻例である。右側は尿管膀胱新吻合術成功, 左側に対して行つた Boari 氏手術は失敗した。該手術後数カ月は腫尿出沒したが

やがて之が止つた。8カ月後には尿瘻は止んだ。Boari 氏手術側は尿管狭窄, 更には閉塞を起すと思いの外, 8カ月も膀胱へ交通状態であり, 又同側して水腎が敢て進行することなく該腎機能もお保たれていた。所がその後再び Boari 氏手術側に関係して腫尿漏を再び来したので尿管S状結腸吻合を行つた。Boari 氏手術の失敗の原因は膀胱弁の幅が狭すぎ, 肥厚した尿管を十分包めなかつたことにある。(裏面)

追 加 黒田恭一(金大)

ボアリー手術に於いて膀胱弁の長さの不足により尿管の過緊張を来したため腎摘除術を余儀なくされた症例を追加した。

追 加 伊藤泰二(阪大)

大阪大学泌尿器科に於いて過去3年9カ月間に取り扱つた尿管腫瘍の11例について報告した。患側は, 両側6例, 左側4例, 右側1例。治療法は尿管回腸膀胱吻合術7例(うち Foret 氏法5例, Cat-tail 法2例) Boari 氏手術3例, 腎切除術1例である。その成績は最近の2例を除いた9例中, 手術そのものの成否については成功8例, 失敗は Boari 氏手術の1例である。但しその8例中結局原疾患で死亡したものが2例あつた。

### 33. S状腸癌の膀胱内浸潤による膀胱腸瘻の1例 馬場正次・江里口渉(大阪中央)

約2年前より頑固な下痢と裏急後重を覚え, 症状は一進一退していたが約40日前よりは尿意頻数, 尿濁, 氣尿, 糞尿を発症した39才男子において, レ線像より膀胱腸瘻を認め, 膀胱S状腸全摘除術, 両側尿管皮膚移植術, 人工肛門造設術を施行した。患者の病歴より約2年前より頑固な下痢が続く, 膀胱症状は比較的に後に発現したこと, 摘除標本の肉眼的所見からレ線所見に一致してS状腸に腫瘍による輪状の狭窄がみられ, 膀胱の変化は腫瘍というより壊死組織塊とみられるものであつたこと, 及び病理組織所見より膀胱粘膜は殆んど正常でその上を腺癌組織で圧迫されている像がみられること, よりS状腸に原発した腺癌の膀胱内浸潤による膀胱腸瘻と考えられる。

追 加 北山太一(京大)

患者は66才の男子で, 便秘, 弛張壁及び頑固な膀胱症状を訴えて来院, 入院後尿中に糞便を混ぜず, 下腹部に腫瘤も触れる。膀胱鏡検査, 膀胱撮影, 注腸造影により, S状結腸腫瘍, S状結腸膀胱瘻と診断, 開腹するも腫瘍はS状結腸内にあり, S状結腸とは膀胱頂部とは広基性につよくゆちやくしていた。S状結腸を健常部にて切断し, 断端は端々吻合をなし, 膀胱はS状結腸腫瘍部と共に亜全剝し両側尿管皮膚瘻を行つた。

組織学的に腫瘍部は円柱上皮癌で膀胱癌癒着部は腫瘍の浸潤なく炎症像を呈していた。

**追 加** 岩佐賢二・下江庄司(大阪厚生年金)

気尿、尿混濁を主訴とした51才の男子にみられた、S状結腸に原発した腺癌の膀胱壁浸潤による膀胱腸瘻の1例を追加する。膀胱は部分的に切除し、腫瘍部をうけたままS状腸を切除、腸断端は端々吻合を施行、左尿管は尿管膀胱吻合術を施行した。経過は良好、術後40日目に全治退院した。

#### 34. 膀胱腫瘍(軟骨肉腫?)症例

細田寿郎・新海圭一・近藤義雄(日生)

77才の前立腺肥大症に合併した膀胱腫瘍であるが、この一部は昨年の本会で報告したが、今回はその腫瘍の病理組織を詳細に検討した。腫瘍は主要なる大腫瘍と小なる数ヶの娘子腫瘍より成り、大腫瘍は軟骨肉腫様所見を呈したが、発生初期と思われる娘子腫瘍では、明かに癌性細胞の増殖がみられ、間質にはすでに僅かながら軟骨形成らしき像がみられた。本症例は主要腫瘍の検索で軟骨肉腫を疑ったが娘子腫瘍で膀胱癌と判明した。即ち、本症例では、発生初期は癌細胞を明に認めたが、腫瘍増大と共に、紡錘形細胞が増殖して、一見肉腫状所見を呈した極めて興味ある膀胱腫瘍の1例である。

#### 質問及び追加

大北健逸(岡大)

著明な多型性のある変化に豊かな組織像のスライドで大変興味深く見ましたが腫瘍を構成する主細胞は矢張り紡錘型の細胞の集団軟骨形成性細胞の散在等から肉腫を考えるべきだと思います。ハイデンハイム鉄ヘマトキシリン染色で描紋はどうでしたでしょうか、再発があると云う事ですので其の後の検査成績をお教え下されば幸甚と存じます。尚演者と同様のなやみを経た小児膀胱平滑筋肉腫症例を最近の泌科要紀に掲載致しました。

#### 35. 男子原発性尿道癌の1例

松浦 滋(神戸医大)

51才の男子。約8年前に会陰部を自転車のサドルで強打し、血尿を見たが、その後自覚症状なく放置し、タイヤにナワを巻いた自転車にて約1年間通勤し、時々会陰部に疼痛を感じる以外に自覚症状もなく放置していた。本年3月排尿障害の訴えにて外来受診。5月3日前立腺肥大症兼尿道狭窄の診断にて入院した。6月28日尿道周囲膿瘍の診断にて外尿道切開術兼膀胱瘻施行。組織学的にも後部尿道に原発した扁平上皮癌と決定した。手術創は大部分哆開し、広範な剔除と永久的な膀胱瘻の設置を考慮したが、漸次悪液質が加わり、10月21日不幸の転帰をとつた。

#### 追 加

本郷美弥(京大)

原発性尿道癌の1例を追加する。症例は60才の男子で排尿障害、血尿、会陰部腫脹を主訴とし、尿道造影にて尿道球部に不規則な陰影を認め、尿道癌或は尿道周囲膿瘍の疑の下に外尿道切開を行い腫瘍を認め、陰茎切断及び膀胱瘻術を施行した。組織学的に扁平上皮癌、患者は術後6カ月で全身衰弱で死亡した。

#### 36. 尿道狭窄症と誤られた原発性男子尿道癌の1例

山田瑞穂(島田市民病院)

66才の男子、淋疾及び会陰部尿道損傷の前歴がある。2カ月前より尿線細小、排尿時間の延長を来していたが、10日前から完全尿閉となり、2日前から遂に導尿も不能となつて来院した。救急的に膀胱高位切開を行い経膀胱的に留置カテーテルを設置し、後部尿道周囲の膿瘍の切開を行つた。会陰部切開創の経過はかばかしくなく、左鼠蹊部にリンパ腺腫瘍を来したので、この剔出と尿道周囲膿瘍腔の試験標本切除を行つた所、共に扁平上皮癌であつた。全身状態不良で根治手術も行えず、2カ月後に不幸の転帰をとつた。

#### 38. 教室における前立腺手術の遠隔成績について

金沢 稔・瀬川陽一・西川恵章・櫻根孝志

(和医大)

1950年4月より1960年9月迄恥骨後法による前立腺単純剔除例118例、亜全剔除例14例、全剔除例19例、膀胱頸部楔状切除例17例、計168例を行つたが、今回これらの手術の術後成績と遠隔成績を124例について調査した。

単純剔除の術後死亡率4.7%、即ち術後血尿消失期間、二次出血、術後合併症、起床離床日数、感性デスクによる尿中細菌感受性検査成績、留置カテーテル、ドレーン設置期間、遠隔成績として尿所見、膀胱鏡所見、排尿状態、血圧、血液所見、性生活、全身状態、膀胱尿道レ線所見等。

詳細は原著にゆづる。

重量により検討した。Estrogen, PHP, 停留睾丸、X線睾丸障害はLeydig細胞機能の低下は軽度であるに反し、Honvan, カドミウム塩投与、下垂体剔除による場合は比較的早期に睾丸Leidig細胞の機能低下を来すものと思われGonads tropin投与による副性器反応性は少い。

詳細は原著にゆづる。

#### 39. 外傷数例 (1)睾丸破裂(2) 睾丸壊死(3) 尿道狭窄 宮崎重(愛媛労災)

(1) Saddle injury によつて左睾丸破裂を来した17才及び21才男子の2例

(2) 約1年半前に受けたソケイ部の打撲が原因と思

われ、その間に3回睾丸の腫張を来たし、腫瘍の疑の下に左睾丸及び副睾丸を剔除、壊死であつた23才男子の1例

(3) 尿道膜様部に高度の外傷性尿道狭窄を有する26才男子に対し、two stagesに分けて Johanson's Techniqueを試みた。

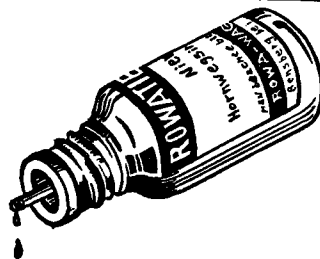
#### 40. 興味ある両側睾丸腫瘍症例

秋山清秀・南後千秋（金大）

所謂 Leukosarkomatose に該当する、51才の両側睾丸腫瘍症例を剖検所見をも附して報告し、文献的考察を加えた。詳細は原著に発表する。

# 胆石・腎石

内服による  
根本療法剤



包装 10cc 滴瓶入

【文献進呈】

# ロウゴール・ロウチン



輸入発売元 扶桑薬品工業株式会社  
大阪市東区道修町2丁目50



製造元 ロウ・ワグナー社  
西ドイツ・ベンスベルグ市